



Title	井島勉博士を悼む
Author(s)	金田, 民夫
Citation	デザイン理論. 1978, 17, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53720">https://doi.org/10.18910/53720</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 井島勉博士を悼む



初代会長として長年、本学会の発展に貢献された井島勉博士は、去る5月12日、2年近くにわたる闘病の生活も空しく、ついに長逝された。創立20周年を迎えようとする今、会員一同にとって、深い哀惜の念を禁じ得ない。井島博士の学問や人格については、今更ここに紹介するまでもないが、悲しみの中に追憶の言葉を述べて、学会における博士の功績を讃えたいと思う。

先生は奉仕の人であった。自己に対しては厳しく、弟子に対しては深い愛情の眼をもつて教育し、学問の世界に対しては、家庭を顧る余裕もなく、その発展に力を捧げ、決して自己の利益に走ることなく、むしろ犠牲的な精神に徹した人であった。学問の発展のためには、大学の枠を越えた学会の組織が必要であるという考えから、戦後間もなく美学会が発足するに至る指導的人物として

活躍され、続いて理論的研究と実躍活動との統合から意匠学会の必要性を叫ばれ、井島博士なしには結成に至らなかったかもしれない本学会が発足することになったのである。学会活動も、複雑な人間関係から不平不満や分派運動などが起る例をしばしば耳にするが、井島先生の主導される学会では、そのような傾向が全く見られないということも、博士の人徳の至すところという外はない。学会に属する者は、研究に専念すると共に先生の威徳を継承することも忘れてはならないと思う。

先生は学問の発展とそのための学会活動に、自己のすべてを捧げられた。晩年、相当身体的な苦痛に耐えながらも、学会には万難を排して出席されるのが常であった。その姿に痛々しさを感じたことも何度かあった。神戸例会があった時など、先生の健康状態を知っている私が「良くおいでになりましたね」と声を掛けると、「皆が学会のために一生懸命にやってくれるのでなあ」と、役員や会員の研究意欲に参加するのが、自分の義務であるかのような顔をされた。もう少し日常の生活を楽しまれたらどうかと、私は自分自身を顧みながら、儒者的な生生の性格を考えたことも度々であった。停年になったらという奥様の期待も空しく、ついに悠々自適の生活に入られることもなく、最後まで学問の世界に身を捧げ尽された先生の霊の安らかならんことを祈って筆を擱く。

(金田民夫)